

ハイジはどんな少女か

— 新旧の翻訳と役割語 —

中村 一夫

二〇一八年度日本語学ゼミ生

一 問題の所在

アニメ「アルプスの少女ハイジ」は、一九七四年の初放映以降、何度も繰り返し返される再放送や各種CMなどによって、「サザエさん」や「ドラえもん」「クレヨンしんちゃん」などと並び称せられるほどの国民的な人気、知名度を誇る作品となっている。制作には宮崎駿や高畑勲、小田部羊一らが関わっており、現代の日本のアニメのメインストリームに繋がる側面を持つ作品でもある。

知られるように、この作品は一九世紀後半に執筆されたヨハンナ・シュピリの児童文学を原作とする。医師の父と詩人の母に育まれたシュピリは、チューリッヒやヒルツェルでの生活を通して、故国スイスを主舞台とする物語を紡ぎ上げた。日本においてこの作品が格段の人気を誇っている証左として、夥しい数の翻訳が出版されていることがあげられる。その中で最も早い時期に刊行されたものとして、野上弥生子の手になる『ハイヂ』（家庭読物刊行会）がある。世界少年文学名作集の中の一冊として一九二〇（大正九）年に公にされたもので、英語からの重訳であるが、

筆力の高い作家による名文は、後に続くあまたの翻訳や関連作品に大きな影響を与えた。その後、野上は一九三三（昭和八）年二月から翌年一月まで新しい抄訳「長編童話 アルプスの山の娘 — マダム・スピリによる—」を「婦人之友」に掲載し、その連載で省略したところを補った上で、一九三四（昭和九）年六月に岩波文庫から『アルプスの山の娘（ハイヂ）』を出版した。

当然のことながら、作品は翻訳者の原作の捉え方を反映した表現によつて組み上げられる。中でも作中に登場する人物をどのように描いているかというところは、訳出する者のイメージを如実にうかがわせる部分である。野上の翻訳のうち、冒頭にほど近い一節を引く。

ハイヂは大悦びで叫びました。「おぢいさん、あたしここに寝てよ。ふかふかしてとてもいい寝床よ。でもシーツあつて。おぢいさん。」上等のシーツがあるよ。」アルムをぢいさんはさう云つて押入から長い羅紗のきれと、麻の大きな袋をとり出し、それをもつて屋根部屋にのぼつて行きました。（二二頁・改行位置変更・傍線稿者）

叔母のデーテに連れられて、初めてアルムおんじのところに来たハイヂは、臆することなくおおらかに振る舞っている。この会話から無邪気なハイヂの姿が想起されるだろう。しかし、その言葉使いはおよそ五歳の幼児のそれには見えない。特に文末に現れる「て」「よ」などの終助詞は女性性を強く想起させる物言いとなる。たとえば『日本語大辞典』の「て」の項目には、「連用形を受けて上昇のイントネーションを伴い、質問・反問等を表わす女性語。優しさと親しみが感じられる」「連用形を受けて『てよ』の形で、自分の意見や判断を伝える女性語。↓つてよ」とあり、さらに「つてよ」の項では、「形容詞の連用形に付いて、話し手自身のことからについて：である、ということとを、あまり断定的でなく聞き手に強く言ういい方。東京などで若い女性が用いた。イントネーションは『よ』が高い」とあつて、いずれもある程度成熟した女性をイメージさせる語として説明が付されている。特に「てよ」は明治時代の女学生が使つたいわゆる「てよだわ言葉」として知られるもので、その当時、女性のことばとして広まったも

のである。しかしながら、現代においては極端に戯画化されたり、風刺的に表現されたりする人物（お嬢様、奥様など）の発言に限られたものとなっているのは周知のことであろう。

近年、この種の潜在的イメージに根ざす表現を役割語と呼び、さまざまなメディアに関わる現象として、広く注目されるようになった。この方面の研究を領導してきた金水敏は役割語を次のように定義している。

ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示される、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。（金水敏『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』二〇〇三年）

役割語は必ずしも現実世界でやりとりされる日常的な話し方を写し取るものではない。特定の表現が特定の人物像やキャラクター、属性などと結びつくという知識を共有しているという点に着目しているのである。その種の類型化された経験知のことをステレオタイプと言うが、役割語はそれと強く関係するものである。それらは類型化、典型化によって物事の本質を暴くことがある一方で、時には先入観や固定観念、偏見なども容易に結びついてしまう危険性もある。

本稿のもととなった四年次生対象の演習では、過去二年間の村上春樹の翻訳における役割語の調査に引き続き、これらのステレオタイプと結びつく特定の表現（役割語や属性表現）に注目し、新旧の「アルプスの少女ハイジ」の翻訳作品を比較することで、高い知名度を誇る作品の表現のありようや日本語が内包する文化的な分類法（発想や享受、影響）について、考察を加えることにした。以下の記述は受講生による報告、質疑応答、議論の中で見いだされたものであり、また各自のレポートとして提出された内容からまとめたものである。本稿はその成果の一部を報告するものである。

二 調査の対象と方法

前節で述べたとおり、本学文学科日本文学・文化専攻の日本語ゼミ（中村担当）では、二〇一八（平成三〇）年度開講の「日本文学・文化演習Ⅱ」（四年次生対象）において、翻訳された海外小説（Johanna Spyri 『HEIDI』一八八〇年〜一八八一年）に現れる役割語や属性表現に関する共同研究を行った。主たる調査対象は一九三〇年代と二〇〇〇年代に刊行された二つの翻訳である。先に記したように、この作品には多くの翻訳があるが、本調査では嚆矢とも言える野上弥生子の作品と近年刊行された新しい上田真而子の作品を比較対象とした。二人の翻訳家の作品の捉え方とともに約七十〜八十年の時を隔てたところにある二つの作品の時代的な特性をも掘り取れると考えられる。

今回の調査に使用したテキストは以下のものである。なお本文を引用する際には旧漢字は新字体に改めた。

野上弥生子訳『アルプスの山の娘（ハイヂ）』（岩波文庫、一九三四年初版、本調査では二〇〇九年三一刷を使用）

上田真而子訳『ハイジ 上・下』（岩波少年文庫、二〇〇三年）

本年度の調査に参加した「日本文学・文化演習Ⅱ」の受講生は、日本語ゼミに所属する学部生十名と大学院の交換留学生一名、あわせて十一名である。以下に彼らの氏名を記す。

青木真澄・諫山望・王偉傑・鴨志田襟夏・佐野なつみ・館和弥・俵谷駿輔・福澤歩美・三上洋大・山口東悟・孟

茜亜

続いて調査の手順を示す。

1 野上版と上田版をそれぞれ受講者で分担する。新旧の翻訳で同じ章が対応するようにした。

2 各自の担当する章から、会話文の中に現れる人称詞と文末の表現に着目し、役割語として機能していると思

われるものを抽出していく。その際、発話者がどのような人物（性別・年齢・性格・職業など）であるかを正確に把握しておく。また会話以外の地の文に、特定の人物像や属性、キャラクターなどをうかがわせる表現があれば、それも抜き出しておく。文末の表現については認定の難しいものもあるため、いわゆる自立語一語を含む一文節を取り出すようにした。

3 2で抽出したものを、人称詞・文末表現・その他と項目ごとに分けてエクセルに入力し、コーパスとして使用できる形に整える。

4 これらの結果をまとめ、登場する人物ごとに属性やキャラクターと表現の相関関係を見出だしていく。特に役割語や属性表現として認められる表現について、考察を加えていく。

今回の調査のために作成したコーパスは、翻訳の問題や役割語、属性表現などを考えるにあたって有益なデータとなる。過去に構築したコーパスとあわせて、紙媒体あるいは電子媒体で公開することを企図している。

三 人をどう表現するのか

とりわけ役割語としてよく機能するものが人称詞と文末に現れる表現である。『日本語学大事典』（二〇一八年）の「役割語」（金水敏担当）の項目には、「日本語の場合、一人称代名詞、および存在動詞・断定辞・アスペクト形式・終助詞等の述語形式が有力な役割語の指標となる。それ以外にも、感動詞・間投詞、命令表現等が重要である。」と記されており、「私がします」「僕がするよ」「わたくしがいたしますわ」「俺がやるぜ」などの例からも明らかのように、伝達される内容は同一でも、それを語る人物像は一人称代名詞と述語形式によって明確に異なるものが多い起こされる。これらの点に着目し、ハイジやペーター、クララたちが新旧二つの翻訳でいかに表現されているのか、どの

ような人物として造形、描出されているのかを見ていく。

本節では、人物造型を強く印象づけるものとして、作中人物が会話で使用する人称代名詞を取り上げることとする。日本語の一人称代名詞には「わたし・ぼく・おいら・あたし・おれ・わし」などがあり、これらを見聞きするだけで話し手の人物像が思い浮かんでくるだろう。人称代名詞が導く人物像は、先の金水の役割語の定義に示されたように「年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格」などの属性が関わっており、社会的な存在としてどう位置付けられるかがより出されることになる。しかしながら、同一人物に異なる人称代名詞の使用が見られた場合、それをどのように解釈すればいいだろうか。次に示したのは、主要登場人物の使用する人称代名詞（一人称・二人称）を野上版と上田版でそれぞれまとめたものである（登場人物の紹介は稿末に記した）。表中では漢字で書かれているものは仮名に開き、また旧仮名遣いは現代仮名遣いに改めて表記した。

登場人物	一人称		二人称	
	野上	上田	野上	上田
ハイジ	わたし・あたしたち・わたし	わたし・わたし	おまえさん・あなた・あなた	あなた・あなた
クララ	わたし・わたし	わたし・わたし	あなた・あなた	あなた
ロッテンマイアー	わたし・わたくしども	わたくし・わたくし	おまえさん・あなた・あなた	あなた・あなた
クララ祖母	わたし・わたくし	わたし	あなた	あなた
デーテ	わたし・わたくし	わたし・わたくし	おまえさん・あなた	おまえ
アルムおんじ	わし・わたし	わし	おまえさん	おまえ
ペーター	ぼく	おれ	おまえさん	おまえ
ゼバスチャン	ぼく・わたし・おれ・てまえ	ぼく・わたし・わたくし・おれさま	あなた・おまえ	おまえ
クラッセン	わたし・われわれ	ぼく	あなた	きみ
ゼーゼマン	ぼく・わたし・おれ	わたし・ぼく	あなた・おまえ	きみ・あなた・おまえ

二つの翻訳での人称代名詞のありようを比較すると、明確な使用法の差異に気付かされる。まず主人公であるハイジの人称詞から確認する。野上版と上田版とは自らのことを「あたし」とするか、「わたし」とするかではつきりとした違いを見せている。

1 あたしどこで寝るの、おぢいさん（野上・二一）

わたしはどこで寝るの、おじいちゃん？（上田・上三七）¹

2 ペーター、ペーター、あたしたちも明日はあんたといつしよに山へ行つて、いちんち遊べるのよ。

（野上・二七三）

ペーター、ペーター、あたしはわたしたちも上へ行くわ。そして一日じゅういるのよ！（上田・下一九二）

1 は初めて訪れたアルムおんじの山小屋での振る舞い、2 はクララとともに山の牧場へでかける予定を喜ぶもので、いずれもハイジの発言である。これらの箇所に限らず、野上版では一貫して「あたし」が使用され、上田版では「わたし」が使われている。言うまでもなく女性の一人称代名詞として使用される「わたし」と「あたし」では、その発話者に対する印象は異なるものとなる。「わたし」は性別を問わず一般的に使われる一人称代名詞であるが、「あたし」はやや色の付いた表現である。金水敏編『役割語小辞典』（二〇一四）の「あたし」の項目には次のような説明がある。

役割語としては、一般的な女性像を表す（女ことば）であり、特に活発、お転婆な女性像を想起させる。女性としてふるまう人物が、年齢にかかわらず、広く用いる。同様の女性像を担う自称詞として他に「わたし」があるが、これに比べると「あたし」には堅苦しさのない、より自然体の女性像や、幼さ、生意気さがイメーজされる。（中略）明治・大正期の小説では、「あたし」を用いるのは、幼く、女性らしい落ち着きやつつまじさがまだ身に付いていない少女や、お転婆で思つたことをなんでも口に出す活発な若い女性が多い。（傍線は稿者による）

この説明に従うならば、野上版に描かれるハイジの姿は、まさに明治・大正期の「若く」「活発」な「自然体」の「少女」の典型的な姿を想起させる物言いとなつてゐると解釈される。それに対して上田版では一貫して「わたし」が使われているが、他の女性たちとの差異を生み出すことはなく、その面からは作中人物の個性が際立つところがないといえよう。肝要なのは、同じ原文から生成される二つの翻訳の中を生きる少女のありようが、説明されることな
く読者に了解されるという点である。これこそが役割語の最大の機能である。

なお野上版のハイジも「わたし」を使用しているのであるが、彼女が自らを「わたし」と称するのはフランクフルト滞在中のことであり、それも極めて限定的なものである。

3でも、わたし二匹だけ今もつて帰つちやいけないこと。クララのとわたしのと、ねえ。(野上・八八)

4わたしすぐこれから行つて、神様にあやまりますわ。もう決して神様のことを忘れたりはしませんわ。

(野上・一三二)

「あたし」と「わたし」の使い分けを野上の意図的なものとするかはさておき、結果的に自然の中で暮らすハイジと都会でのハイジのありようを示唆する指標として取り上げることができらう。

次に「わたくし」であるが、野上版ではロッテンマイアー、クララ祖母、デーテ（ハイジ叔母）が使用している。いずれも成人した女性たちであり、ハイジやクララのような子供がそれを使うことはない。ここでは年齢による位相差をはつきりとうかがわせている。しかし、上田版においてはクララも「わたくし」を使用しており、クララの精神的な成熟の現れと同時にそれを使うことのないハイジだけが他の女性たちとは異なる存在として描かれてゐると受け取ることができる。

右に述べたものの以外で野上版において目に付くのは、二人称代名詞「あんた」「おまえさん」である（上田版でもハイジが「あんた」を使用する）。いずれも近世前期に上方の遊里から出たものとされている語であり、後代では庶

民的な下町育ちを意識させる物言いである。特に「おまえさん」は上田版にはまったく見えず、野上版で使用されるも、ハイジ、デーテ、ペーターたちに限られており、彼らの置かれてある社会階層（下位）を強くうかがわせるものとして機能している。その中であつて、ゼーゼマン家の教育係たるロッテンマイアーの使用する一例がある。

5 なんですつて、帰るんですつて、お前さんはうちへ帰りたいんですか。（野上・九八）

これは突飛な発言をしたハイジに対するものであり、この場面における特別な感情の揺らぎゆえの物言い、あるいはロッテンマイアーの本来的な性質によるものなど、文学的な考察の対象となりえる用例であると言えよう。なお「あんた」を使うのが女性だけであることにも注意させられる。

次に、男性のものにも簡単に触れておくことにする。ハイジの山での生活において欠くことのできない人物である羊飼いのペーターは、野上版では「ぼく」、上田版では「おれ」をもつぱら使用している。

6 ぼくは、あのぶち山羊のお乳を飲むさ。（野上・三二） おれの山羊から。あのブチからだ。（上田・上六三）

7 僕は出来るよ。（野上・二四〇） おれ、できるぞー！（上田・下二三五）

もともとへりくだりの自称詞として使用されてきた「ぼく」は、明治時代になつて書生が使うことで広く普及するようになった。やがてこのことばは知的なエリート層や若年層の男子に広がり、今に至る。「ぼく」を使用する野上版のペーターが知的なエリート層であるかはひとまず措くとして、どこかナイーブで未成熟かつひ弱な存在であることを示唆するのに、この自称詞は有効に機能している。一方、こうした「ぼく」に対して非知的、野卑な印象を与える人称詞が上田版ペーターの使用する「おれ」である。上田版で「ぼく」を使用するのは、ゼーゼマン、クラッセン、ゼバスチャンといった都会（フランクフルト）の人間ばかりであり、村（架空の村デルフリ）に住む少年とはやはり明確な描き分けがなされているとおぼしい。またハイジの祖父であるアルムおんじは、野上版・上田版ともに「わし」という老人を想起させる一人称代名詞を常用するが、「わし」は老人語や博士語といった役割語によく見えるもので、

年配者の権威ある物言いとして理解されることが多い。ただし、野上版のアルムおんじは「わたし」や「あなた」といった標準的な人称詞も使用している。これらは主に都会の人々を相手にした時に現れており、アルムおんじという人物が社会的常識を備えていることを印象づける役割語として働いていると考えられる。

四 文末をどう締めくくっているのか

本節では、人称代名詞とともに役割語の有力な指標となる、主に文末に現れる表現を見ることにする。これについても前節と同様の一覧の形で示すべきであるが、いたずらに種類が多くなるため、それぞれの人物において特徴的なものを取り出して論ずることとする。

「あなたはアルムを皆さんのところにめた子供だらう。ねえ。」「ええ、さうなの。」「どうして帰つて来たんだね、向ふでよくしてくれないのかね。」「さうぢやないわ。フランクフルトではとても大事にされたのよ。」「ぢやなんだつて舞ひもどつて来たりするのだね。」「ヘル・ゼーゼマンが暇をくだすつたからなの。でなければ帰りたくても帰れなかつたんだわ。」(野上・一六四)

ハイジがフランクフルトからデルフリ村に戻ってきた時に、荷馬車の馭者と交わした会話である。どちらがハイジの台詞であるかは自明であるが、それを可能とするのは傍線を付した「なの」「わ」「のよ」「だわ」などの文末の表現である。いずれも主に女性が用いるものであるが、若い少女の話し方としてはいさかませた印象がある。しかし、これは野上版だけの特徴ではなく、上田版でも文末の表現についてはほぼ同様の用法が確認できる。同じくだりを引用する。

「おまえ、あの上の、アルムじいさんのとこにいた子だろう？ おじいさんのとこに。」「そうよ。」「なら、おま

え、遠くから、また帰ってきたんだな。なんでだ？ いやなことでもあったのかい？」「ううん、そうじゃないの。フランクフルトの暮らし、あんない暮らしはだれにもできないわ。」「そんなら、なんで帰ってきたんだよ？」「ゼーゼマンさんが帰っていいっておっしゃったから。そうでなかったら、わたし、帰ってこなかったわ。」「

(上田・上三〇〇)

野上版に比べると、全体的に現代の口語に近いものになってはいるが、「よ」「の」「わ」などの終助詞の使用については変わらない。他にも両翻訳に共通して現れる「かしら」「ね」「もの(もん)」などの終助詞も女性を感じさせるものである。こうした物言いは、個別の人物像を際立たせるというよりは、女性であることをまず出す定型的な表現、役割語として使用されていると考えられる。またクララやロッテンマイアー、クララの祖母、デーテラについても、ハイジと同様の文末の表現が確認できた。

以下では新旧の翻訳で異なるもの、あるいは特定の人物にのみ現れているものを掲げることにする。

8 だつて、書物を読むのはむづかしいんですもの。(野上・二二〇)

9 わたし、ひとりで行けるわ。デルフリからアルムまでの道なら、ちゃんと知ってるもん。(上田・上二九八)

8 に見えるのは終助詞「もの」である。「終止した文に付加して、不満の意をこめて反論したり、甘えの気持をもって自分の意思を主張したりする。主として女性・子どもの表現」(『日国』)とされるように、これもまた典型的な女性を想起させる語として認めることができる。一方、上田版ではもっぱら「もの」よりもくだけた「もん」のみが使われており、より子供らしい印象を与えるものになっている。

10 やがておばあさまはお帰りになるのだから、あなたはあて頂戴。(野上・一二七)

11 ね、云つて頂戴。あなたは勉強の方はどういう風にしてますの。(野上・一一九)

前者はクララの、後者はクララ祖母の発言で、いずれもハイジに向けてのものである。動詞の連用形に助詞「て」

が付き、補助動詞の命令形のように用いて、親しみをこめて相手に求める表現である。これらもまた女性性を感じさせるものであるが、ある種の社会階層（上位）、あるいは知識教養を備えた層を思い起こさせる役割語となつていよう。そうすると、フランクフルトからデルフリ村に戻ってきた直後のハイジがペーターに対して「さうしてわたしにも今日はを云つて頂戴よ」（野上・一七六）と話しているのは、「わたし」との共起ともあいまつて、図らずも都会の生活に親しんだハイジの姿を写していると解釈できる。なお同様のものとして、野上版ではフランクフルト在住時のハイジの会話に「あたし、いつだつて云はれてゐたのですわ」「学校へなんかあがりませんわ」などのような「丁寧語＋わ」の使用も見られ、村での姿や振る舞いとは異なるものが想起される。

一方、両翻訳において男性たちの会話には、「か」「かい」「さ」「ぞ」「だ」「だね」「だよ」「よ」などの助詞、助動詞あるいはその組み合わせの類が用いられており、どの表現も男性性に傾く印象を感じさせるものであった。

12 ハイヂ、おまへも山羊といつしよに山へ遊びに行くかい。（野上・二七）

おまえもいつしよに、牧場へ行くかい。（上田・上五二）

13 よし、わかつた。——さあ、可愛いお友達が帰つて来た。つめたい、いい水を持つて来てくれたかね。

（野上・一〇九）

わかつた、わかつた、クララ。ほら、きみのお友だちがもうもどつてきたよ。ん、くみたての、おいしい水をもつてきてくれたかい？（上田・上二一六）

12 はアルムおんじのハイジへの会話、13 はゼーゼマンのクララとハイジへの会話である。「かい」は親しみの気持ちをこめて相手に尋ねるものであり、他方「かね」は疑いながら相手に念を押す意を表すものである。どちらも主に成人男性が対等以下の者に対して用いるものとして認めることができる。新旧の翻訳による二人の男性の印象に大きな違いはないが、「かね」は野上版にのみ使用が見られる語であつた。彼らの関係性から照らし見て違和感を覚える

ものではない。

ハイジと行動をとる少年ペーターには彼特有の文末の表現がある。「ちまう」「ちやう」である。「ちまう」は、助詞「て」に動詞「しまう」の付いた「てしまう」の変化したものであり、「ちやう」はその「ちまう」がさらにつづまった表現である。「ちまう」「ちやう」は、ともに東京方言などのややくだけた物言いとしても広く使用されるものであった。

14 櫓が江りすぎて、あんまり遠くへ行つちまつたんで遅れたんだ。(野上・二三二)

そりがすべりすぎちやつたんだ。そいで、おそくなつた。(上田・下二〇)

15 すつかり出来ちやつた。(中略) 山がすつかり凍つちまつたんですよ。(野上・二三二)

14と15はペーターの会話からである。「ちやう」は両方の翻訳で使用されているが、「ちまう」は野上版だけに見られるものである。アルプスに暮らす少年が威勢のよい江戸っ子であるかのごとく話しているが、その種のイメージを援用する形で彼の会話が構築されているとおぼしい。方言も時に特定のイメージを想起させる役割語として機能するが、右のペーターの用例もまた同様のものとして捉えることができるだろう。これと同種の方言の使用法を別の人物でも確認できる。ゼーゼン家に雇われているロッテンマイアーやゼバスチャンの発話には待遇表現が数多く見られるが、特に丁寧語(です・ます・ございます)を多用するロッテンマイアーに「ござんす」という用例(野上版のみ)が現れる。

16 アデライデだと呼びよくてよござんすね。(野上・六八)

ロッテンマイアーがフランクフルトにやつてきたハイジの名を尋ねるくだりでの発話である。「ござんす」は「ござりまする」の変化したもので、近世になって遊女のことばから出たものである。

元祿期には上方の町屋の女性語として、江戸後期には江戸の町屋の女性語となり、さらに一般に男性も使用する

ようになり、明治の東京語の一部に引き継がれたといわれる。(中略) 明治以降の文学作品では一般の女性のほか、山の手の裕福な男性、下町の男性などが使っており、昭和に入ってから三〇年代頃の東京の「山の手言葉」に残ることがあった。(『日本国語大辞典』)

ロッテンマイアの「ござんす」は、フランクフルトの名家に仕える女性を、東京の山の手に住まう人のイメージで捉えさせることになるだろう。先のペーターの「ちまう」「ちやう」と同じく方言を役割語として巧みに組み入れているといえる。

この他、アルムおんじの使う老人語「わい」(上田版) やゼーゼマンの「てくれ」「ておくれ」(野上版) などにも触れておきたいところであるが、今は省略に従う。

五 属性やキャラクタをうかがわせる表現

ハイジはよく走っている。また跳びはねてもいる。

17ハイジはぬいだ着物を一まとめにそこへ積んでおき、今度こそペーテルにも山羊にも負けない気で、びよんびよん駆けて行きました。(野上・一五)

それから、ぬいだものを全部、きちんとたたんでつみかさねると、ペーターとならんで山羊たちの後ろから、とびはねとびはねのぼりはじめました。(上田・上二五)

ハイジの動作を表す表現を抽出すると、「走る」「駆ける」「飛ぶ」「飛び上がる」などが多用されていることが知れる。訳出に異なる語を選ぶことはあっても、これは野上版、上田版に共通するところである。これらの表現は「元気のよい少女」をよくうかがわせているが、定延(二〇一一)⁴ はある種の行為が動作主のキャラクタを暗に示すもので

あることに着目し、それを「表現キャラクタ」と呼んだ。たとえば「ニタリとほくそ笑む」という動作表現は行為の行い手のキャラクタ（＝悪者）を暗示するというようなものである。ハイジの「走る」や「駆ける」はいささか直裁的ではあるが、全編（フランクフルト・デルフリ村）を通じて繰り返されることで彼女の人となりを示す「表現キャラクタ」になっていると解釈できる。

また次のような特徴的な表現も両翻訳に散見される。

18 おお、おばあさま、わたしいつまでも此処にゐたいわ。（野上・二五三）

19 おお、ハイヂ、わたしもあなたみたいに歩けるといいんだわねえ。（野上・二五四）

20 ああ、ハイジ、わたしもあなたといっしょに歩きまわりたいのに！（上田・下一六〇）

いずれもクララの発話からである。依田（二〇〇七）⁵³によれば、この「おお・ああ十人物」の文型の源泉は明治時代にまで遡ることができ、「西洋文化を基にその表現性を広げながら翻訳劇で用いられて来た」ものであるという。さらに「自分の情意を表出させながら相手に投げかける表現であり、話者に気高い西洋人のイメージを付与する」ものとして機能する。首肯される指摘である。『アルプスの少女ハイジ』の新旧の翻訳においても同様であり、大正から平成に至るまで役割語として定型化していることが理解されるのであった。

今回の調査では役割語以外の表現、すなわち多用されるオノマトペや翻訳調の外来語などにも考察の範囲を広げているのであるが、本稿の主たる報告目的から外れるために、別の機会に提示することとしたい。

二〇一六年度、二〇一七年度の村上春樹の翻訳に見る役割語の調査に引き続き行った今年度の共同研究であるが、新旧の『アルプスの少女ハイジ』において、野上版、上田版ともに役割語による人物像の形成が行われている。時には戲面的に過ぎる使用も見られた。しかし、それぞれの翻訳内部の論理（あるいは世界観）にしたがって役割語が使い分けられており、必ずしも同一人物が同じような人物像、キャラクタを想起させるものとなっているわけではない。

ことが理解された。演習中の限られた時間での調査ゆえ、行き届かないところが残された憾みはあるが、それらは後の課題としたい。演習中での報告や議論、さらには提出されたレポートで指摘されたもののすべてをここに示すことはできなかったが、各自が提示してくれた多様な着眼点は今後の継続的な調査、考察に繋がるものとなるだろう。本報告は受講生の取り組みをまとめたものであるが、文責はすべて稿者にある。

(注)

(1) 本文を引用する場合は両翻訳者の姓のあとにページ数を付している。なお上田版は上・下二分冊なので、その旨を書き加えた。

(2) 加藤幸治教授(国士舘大学文学部史学地理学科)からは、アニメ『アルプスの少女ハイジ』において、デルフリ村では赤、フランクフルトでは青がそれぞれ象徴的な色彩として使用されているとのご教示があった。

(3) 近世後期に「あなた」が生まれて敬意を下げたが、上方では「おまいさん」、遊里から生じて広まった「おまえはん」「おまはん」など多様な形があり、江戸では庶民に「おめへさん」の形で多用された。(『日本国語大辞典』『おまえさん』の項)

(4) 定延利之『日本語社会のぞきキャラくり』(二〇一)

(5) 依田恵美「〈西洋人語〉『おお、ロミオ!』の文型 —— その確立と普及 ——」(金水敏編『役割語研究の地平』二〇〇七、所収)

参考：「アルプスの少女ハイジ」登場人物

ハイジ 一歳の時に両親を亡くす。五歳でアルムへ。八歳でフランクフルトへ連れて行かれるが、病を得たため、

再びアルムへ戻る。

アルムおんじ　ハイジの父方の祖父。昔は村人たちと良好な関係を築いていたが、今は訳あって一人で山に住む。七十代。

ペーター　羊飼いの少年。春から秋にかけて、村の山羊を山へ連れて行き、放牧させる。祖母と母（ブリギッテ）と暮らす。

クララ　フランクフルトの名家ゼーゼマン家の子女。足を悪くして立つことができない。ハイジより四歳年長。ロッテンマイアー　ゼーゼマン家の召使いの監督役。家事一切を取り仕切る。ハイジにつらくあたる。使用人にゼバスチャンとティネットがいる。

ゼーゼマン　クララの父親。ビジネスマンで欧州中を忙しく駆け回っている。

おばあさま（大奥さま）　クララの祖母（ゼーゼマンの母）。ホルシユタインに住む。ハイジのよき理解者。

クラッセン　クララの主治医。ハイジのよき理解者。のちにアルムおんじと交流を深める。

デーテ　ハイジの叔母（母親の妹）。ハイジが両親を亡くした後、一人で彼女を育てた。フランクフルトに働きに出ることになり、ハイジを祖父のところへ連れて行く。初登場時二六歳。

謝辞

文学部の同僚である加藤幸治教授（経済地理学）には、「日本文学・文化演習Ⅱ」においてスイスに関する特別講義をお願いした。加藤教授はスイスはもとより「アルプスの少女ハイジ」にも深い造詣を示される。今回の共同研究に裨益することの多大であったことをここに記し、謝意を表するものである。なお加藤教授には御著書『スイスの謎』（春風社、二〇一八）がある。ついて見られたい。